

「少年詩」に対する

素朴な質問と疑問に答える

畑島喜久生

1 はじめに

詩は言語の「極北」です。それは、表現の価値としての文学というときも同じです。ですから「少年詩」のばあいにもそれは同断、ただ想定される読者という対象の相違ということだけです。子ども自身が書く「児童詩」のばあいは、そこでの詩の言葉が文学以前で、その意味では同列ではありません。文学の前駆体ではありますが。したがって「少年詩」との対比としては「童話」を考えてくださればいいわけで、その児童文学としての「詩」のジャンルに相当することになります。

詩は、「散文」としての言葉によっては書きださきれない、内的な思いを表現します。また、目には見えないものを心の眼で視て、それを散文とは違う言葉で書きだす、ということも。ですから、それは「言語」を超えているのです。「意識」をも「論理」をも。現代詩のばあい「倫理」をさえも。端的な表現でそれをいうと「超—言語」「超—意識」「超—論理」「超—倫理」ということになるのですが、「超える」という「超越」の意味でいうなら、宗教と似て

いる、といっているのかもしれない。そこでの表現には言語をもってする——ということを除いて。「少年詩」のばあい、それを「子ども」に向け、「子ども」を直接の読者対象として想定する、という要素が加わることになりますけれども。ですから「超—倫理」の分は当てはまりませんが、その他は全て現代詩と同じ、ということになるのです。

2 「少年詩」という言葉（表現）が使われたのは、いつの頃からですか？

どの「児童文学」のジャンルもが、おとなの文学の派生として生まれでているように、「少年詩」もまた同じです。そしてここでいう「おとなの詩」とは「新体詩」です。明治一五（一八八二）年、『新体詩抄』として編纂された「泰西のポエトリー」すなわち西欧からの導入詩で、在来の伝統的短詩型文学とは異なる新文学運動としての詩なのです。ですから「童謡」とは全くの別系列です。「童謡」が、「童唄」や「子守り唄」を源流としているのとは違って。「童謡」のばあいは、歌うことを前提に創られている